佛身論と唱題成佛

（日蓮宗現代宗教研究所研究員）　小瀬修達

一、佛身論の成立

天台における三身即一の佛身論は、久遠実成によって成立した。

「一代聖教大意」昭和定本　七一頁

「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」昭和定本　七〇二・七一二頁

「夫れ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。この三千、一念の心にあり。（「摩訶止観」五上観不思議境）

（中略）

妙楽の承釈して云く、［まさに知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、この本理に称うて、一身一念法界に遍し。］の文」（「止観弘決」五上　観不思議境）

釈迦牟尼佛が本時成道の時、身土一念三千の本理に称い、一身一念が法界に遍満した訳であるが、ここで云うところの「本理に称う」とは、「法華文句」の第九、壽量品、三如來を釈する中に次のように説かれている。

「法華文句」　九下、壽量品一六、大正蔵経三四、128a

「三如来とは、大論(大智度論)に云く、法相の如く解し、法相の如く説く、故に如来と名くと。如とは、法如如の境は、非因非果にして、有佛無佛、性相常然なり。

一切處に遍して而して異り有る事無きを如と為し、動ぜずして而して至るを來と為す、此れを指して法身如來と為すなり。

法如如の智もて如如眞實の道に乗じて來て妙覺を成ずるに、智は如の理に稱う、理に従て如と名づく、智に従って來と名づくるは即ち報身の如來なり、故に論に云く、法相の如く解す故に如來と名づくるなりと。

如如の境と智と合するを以ての故に、即ち能く處々に正覺を成ずることを示す。」

「一念三千理事」　昭和定本七九頁

「次に報身とは、大師云く［法如如の智もて如如眞實の道に乗じて來て妙覺を成ずるに、智は如の理に稱う、理に従て如と名づく、智に従って來と名づくるは即ち報身の如來なり］盧舎那と名け、此には浄満と翻すと釈せり。

此は如如法性の智、如如真実の道に乗じて妙覚究竟の理智法界と冥合したる時理を如と名く。智は来也。」

図A

当知身土一念三千。故成道時称此本理一身一念遍於法界

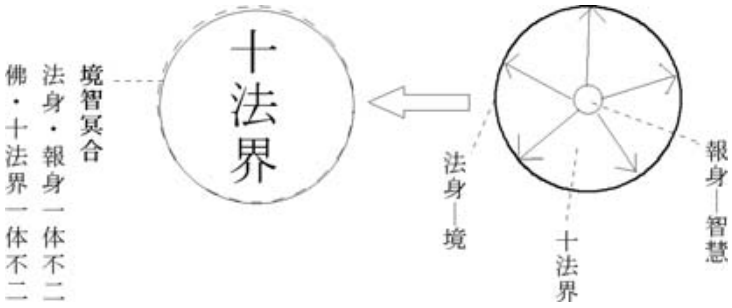
←

○法如如智。乗於如如眞實之道來成妙覺。智稱如理。中略、以如如境智合故。即能處處示成正覺。

○此は如如法性の智乗如如真実道妙覚究竟の理智法界と冥合したる時理を如と名く。智は来也。

図B

理境—法身佛
智慧—報身佛
智稱如理—境智冥合→能處處示成正覺—応身



釈尊の本時成道以前の法身佛は、無始無終・不動不変の存在として法界に遍満していた（「遍一切處而無有異爲如。不動而至爲來。」）が、法身の理境としてあったのみで、衆生に働きかける事は無かったと考えられる。

久遠実成の時、報身の釈迦牟尼佛は、無明を完全に断じる事により妙覺の悟りを開くと佛の一身一念が法界に遍満した。（「故成道時称此本理一身一念遍於法界。」）

「称此本理一身一念遍於法界」の本理とは法身の理境であり、「智稱如理」すなわち、報身の智慧が法身の理境に沿って遍満した（「法如如智。乘於如如眞實之道來成妙覺。」）のである。ここに、境智冥合して十法界に遍満する佛が成立し（上の図・図A参照）、この遍満した智慧に三千世間（境）が証されて一念三千が成立した。

また、この法身の境と報身の智慧が一体となった佛は応身佛を出現させる基盤となって存在している為、実質上、三身即一の佛が成立した訳である。（図B参照）

以上のように、久遠実成の釈迦牟尼佛が成立する際、佛身に起きた現象を佛・法界の一体不二と法身・報身の一体不二の二面に分け、A、佛・法界の一体不二…佛と法界が一体不二となることにより認識された真理として、①一念三千、②一佛乘・佛性、③絶待妙—開会、④妙法　と　B、法身（境）・報身（智）の一体不二…三身即一の佛の成立を

それぞれ佛身論を観点として検証してみる。

A、佛・十法界一体不二

①一念三千

「摩訶止観」五上、観不思議境一、大正蔵経四六、54ａ

「夫れ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具すれば百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界に即ち三千種の世間を具す。この三千は一念の心にあり。若し心無くば已みなん、介爾も心有れば即ち三千を具す。亦た一心前に在り一切の法後に在りと言はず。亦た一切の法前に在り一心後に在りと言はず。（中略）

若し一心從り一切法を生ずるは、此れ則ち是縱なり。若し心一時に一切法を含むは、此れ即ち是横なり。縱も亦不可なり、横も亦不可なり。ただ、心は是一切の法、一切の法は是心なるなり。故に縱に非ず横に非ず、一に非ず異に非ず、玄妙深絶にして識の識る所に非ず、言の言う所に非ず。所以に稱して不可思議の境と爲す。意ここに在るなり云云。」

「止観弘決」五上、観不思議境一、大正蔵経四六、295ｃ

「それ一心の下は理境を結成す。（中略）

まさに知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時、この本理に称うて、一身一念法界に遍し。」

法身佛は、無始無終の存在として法界に遍満していた訳であるから、妙楽大師が釈する「この本理に称うて、一身一念法界に遍し。」の本理とは、三千世間に遍満する法身の理境(身土一念三千)であり、久遠実成の時、「法如如の智もて如如眞實の道に乗じて來て妙覺を成ずるに、智は如の理に稱う。」(「法華文句」前掲)と、報身の智慧が法身の理境に沿って十法界に遍満したのである。ここに、境智冥合して法界と一体不二となった佛が成立し、佛慧が法界(三千世間)に遍満したことにより、境である三千世間を証して一念三千が成立した。

一念三千は、本時成道の観点からみれば、佛慧〔智〕が法界〔境〕に遍満したことにより、佛慧〔智〕と法界(三千世間)〔境〕が合一〔境智冥合〕し、法界全体(三千世間)が同時に佛の認識となる状態といえる。この成道における実証をもって一念三千の成立とした訳である。故に、衆生においても一念に三千を同時に観ずることが行となる。したがって、一念と三千の関係は、一念から三千(一切法)が生じるものでも、一念に三千(一切法)を含むものでもなく、「心は是一切の法、一切の法は是心なるなり。」と、心と三千(一切法)の合一、即ち、「境智冥合」を以て悟りの境地としている。

「事理供養御書」昭和定本一二六三頁の「爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心すなはち大地、大地則ち草木なり。爾前経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。」の文は、この「摩訶止観」観不思議境の文を解釈したものであり、一念三千における境智冥合の境地を説いたものである。

②一佛乗・佛性

「法華玄義」五下、釋名三法妙、大正蔵経三三、746a

「此の經の三軌は共に大乘を成ず。彼は法身の徳を明す。此は實相と云う。（中略）
但だ涅槃は佛性を以て宗と爲すも、一乘の義を明さざるに非ず。
今經は一乘を以て宗と爲すも、佛性の義を明さざるに非ず。」

法身遍在
- 佛身―佛性――涅槃経
- 教法―一佛乘―法華経

涅槃経の「一切衆生　悉有佛性」の説は、法身佛が法界に遍在する故に、一切衆生は佛の性質を帯びていることを「佛性」と説いたものであり、法華経では、この一佛が法界に遍在する状態を法身＝佛法（一佛乘）として、「十方佛土中　唯有一乘法」と、一佛乘を九法界の衆生に開会する「一乘」であるから、「佛性」は法身における佛身の法界遍在、「一乘」は佛法の法界遍在として、「法佛一体」（法身＝佛法）の同一真理に基づくものである。

③絶待妙―開会

「摩訶止觀」一上、發大心一、大正蔵経四六、９ａ
「普賢觀（結経）に云く、［毘盧遮那遍一切處］。即ち其の義也。
當に知るべし一切法は即ち佛法なり。如來法界なるが故なり。」

「法華玄義」二上、釋名絶待妙、大正蔵経三三、97a

「四に圓教若し起れば、無分別の法を説く。邊に即して而も中、佛法に非ざること無く、亡泯清淨なり。豈に更に佛法あって佛法に待せんや、如來法界なるが故に、法界の外に出でて、復た法あって相形比すべきもの無し。誰を待して麁と爲し、誰に形へて妙なることを得ん。待す可き所無く、亦た絶する所無し。知らず、何に名けて強て言て絶と為さん。」

「法華玄義釋籤」二上、釋名絶待妙、大正蔵経三三、845c

「初の文は、既に〔圓教若し起れば無分別の法を説く〕と云う。教に譚する所の〔絶〕は、前の諸教を絶する故に〔亡泯〕と云う。次に〔豈に更に〕の下は、明絶待の相状を明かす。法界體一にして、復た形待無きことを明かす。〔誰を待して麁と爲し〕等とは、能待なきを明かす。能は即ち是れ妙なり。法の外に法無し。誰を待して麁妙とせん。〔待す可き所無く〕等とは、所絶無きを明かす。所は即ち是れ麁なり。法の外に法無し、故に所絶無し。」

絶待妙―佛・十法界・一切法
- 教法　一佛乘　法開会
- 佛身　九界具佛界　人開会

この様に天台は、十法界と佛が一体不二である状態を「如来法界」と呼び、法界と佛(法身)が一体不二であり、相対するもののない絶対の境地(「明法界體一無復形待。」)を「絶待妙」とした。この境地では、十法界の全ての存在・法則(一切法)は、仏法(法身)と一体不二である故に、全ては仏法(一佛乗)であるという思想が開麁顕妙すなわち「開会」である。このように、佛身論を表として開会を考えると、法界に遍満する久遠本佛と九界の衆生との一体不二を説くのが「人開会」であり、法身佛は仏法(一佛乗)であるから、この仏法と爾前経・世法との一体不二を説くのが「法開会」である。

④妙法

「法華玄義」一上、序王、大正蔵経三三、681a

「序王。言う所の妙とは、妙は不可思議と名くる也。言う所の法とは、十界十如權實の法也。」

「法華玄義」一上、本序、大正蔵経三三、681c

「又た妙とは、十法界十如の法なり。此の法即ち妙、此の妙即ち法、二無く別無し、故に妙と言う也。(中略)妙即ち法界、法界即ち妙とは、體を叙する也。」

「止観弘決」一〓二、灌頂縁起、大正蔵経四六、153c

「正しく法華を引いて妙法の體を示す。法體は祇だ是れ同體の境智なり。」

「法華玄義」一上、七番共解一票章、大正蔵経三三、682a

「分別とは、但だ法に麁妙有り。若し隔歴の三諦は麁法也。圓融の三諦は妙法也。」

境智冥合した釈迦牟尼佛が法界と一体不二となった真理を妙法と云い、三諦圓融の理を表す。

「法華玄義」二上、釋名正解、大正蔵経三三、692c

「四に正しく今意を論ずるに二と為す。先に略して彼の名を用いて妙の義を顕す。

因に三義を具するとは、一法界に九法界を具するを體廣しと名く。

九法界の佛法界に即するを位高しと名く。

十法界の即空・即假・即中なるを用長しと名く。一に即して而も三を論じ、三に即して而も一を論ず。各異に非ず、亦た横に非ず、亦た一に非ず、故に妙と稱する也。

果の體に三義を具すとは、體は一切處に遍ずるを體廣しと名く。久しく已に成佛して久遠久遠なるを位高しと名く。本より迹を垂れ、過・現・未來三世に物を益するを用長しと名く。是を因果六義、餘經に異なるなりと為す、是の故に妙と稱す。」

- 妙―因果六義
  - 因具三義
    - 一法界具九法界名體廣。　十界互具
    - 九法界即佛法界名位高。　九界具佛界（開会）
    - 十法界即空即假即中名用長。　円融三諦
  - 果體具三義
    - 體遍一切處名體廣。　法身偏在
    - 久已成佛久遠久遠名位高。　久遠実成
    - 從本垂迹過現未來三世益物名用長。　三身即一・三世益物

「法華玄義　別釋　釋名」において「妙の義」を略して「因果六義」に解釈している。

久遠実成（位高）の時、佛の智慧が法身偏在の境（體廣）に遍満することにより、境智冥合した釈迦牟尼佛が成立し、この法身・報身の一体となった佛を本地佛として、垂迹佛である応身佛が応現する訳であるから、久遠実成の当初に三身即一の佛が成立し、三世に衆生を利益する活動（用長）もこの時はじまったことになる（果體具三義）。「因具三義」の内容は、十界互具であるが、この久遠実成の時、因位の九法界に佛法界が遍満した事により、九界に佛界が具されて（位高）十界互具が成立した（體廣）。十界互具は、法界に佛慧が遍満することにより、十法界が互いに融合することが認識できる円融三諦（用長）を理論の根底にもつ訳である。したがって、「因果六義」に示される「妙の義」は、久遠実成により成立した法界に遍満する釈迦牟尼佛の存在様相と救済活動を総称したものと言い得るだろう。

妙法（境・智）十法界
- 境―所証―法身―佛性・一佛乗
- 智―能証―報身―佛慧

久遠実成の時、釈迦牟尼佛が法界に遍満し、境智冥合して法界と釈迦牟尼佛が一体不二となった状態が唯一絶対の真理「妙法」である。佛が法界に偏在する故に、この中の衆生は悉く「佛性」を具し、この一佛の法界遍在を教法として「一佛乗」と云い、仏と法界の一体不二なる関係を明かすのが「開会」である。

B、法身（境）・報身（智慧）一体不二―三身即一の成立

「法華文句」九下、壽量品一六、大正蔵経三四、129a

「此の品の詮量は、通じて三身を明かす。

若し別意に従はば、正しく報身に在り。何を以ての故に義便に文會す。

義便とは、報身の智慧は上に冥じ下に契うて三身宛足す、故に義便と言う。

文會とは、［我れ成佛してより已來、甚だ大に久遠なり。］

故に能く三世に衆生を利益したまうと、所成は即ち法身、能成は即ち報身、

法と報と合するが故に、能く物を益す、故に文會と言う。

此を以て之を推すに、正意は是れ報身佛の功徳を論ずる也。」

「摩訶止観」六下、破遍横竪、大正蔵経四六、85a

「又金光明(経)に稱して應身と爲す、境智相應する也。

境に就いて法身と爲し、智に就いて報身と爲し、用を起すを應身と爲す。」

境智冥合して法身と報身が一体となった佛は、法界内の衆生教化の為に応身佛として出現する事が可能になった。すなわち、本時成道の時、法身と報身が一体となった事により応身出現の基盤が完成し、三身即一の佛が成立したのである。また、法身佛は報身の成道によって初めて存在が証され、法身と報身が一体となり応身が出現可能になった事から、本時成道の時、三身の顕本が成されたと考えられる。

「報身智慧上冥下契」

三身即一の佛身の中心は、報身佛であり、報身佛の智慧は、上は法身佛(境)と境智冥合して一体となり、一佛乗の真理を体現し、下は応身佛の智慧となって衆生を利益するという流動性をもった働きをする。すなわち、三身の中で佛の心の働きを司るのが報身の智慧である。

中道　　上冥　　空・仮(二辺)

絶対　法身　報身　応身　相対

下契

三諦円融　即空即仮即中（不但中）

┌中即而辺（中即空仮）―絶対即相対
└辺即而中（空仮即中）―相対即絶対

即空即仮即中の三諦円融の理を二元的に表すと、「中即而辺（中即空仮）」・「辺即而中（空仮即中）」となる。報身の智慧は、上は法身の中道絶対の境地から下は空仮相対する現実世界へ、絶対から相対、相対から絶対へ自在に認識する事が可能である。中道絶対の真理のみ（但中）ならば、現実世界に応現できぬ訳であるから「報身智慧上冥下契」は、報身の智慧の働きが、中即空仮・空仮即中の三諦円融の理（不但中）を表していると考えられる。

「一念三千理事」　昭和定本七九頁

「次に報身とは、大師云く［法如如の智もて如如眞實の道に乗じて來て妙覺を成ずるに、智は如の理に稱う、理に従て如と名づく、智に従って來と名づくるは即ち報身の如來なり］　盧舎那と名け、此には浄満と翻すと釈せり。此は如如法性の智、如如真実の道に乗じて妙覚究竟の理智法界と冥合したる時理を如と名く。智は来也。」

「法華文句」九下、壽量品一六、大正蔵経三四、128a

「智は如の理に稱う、理に従て如と名づく、智に従って來と名づくるは即ち報身の如來なり、故に論（大智度論）に云く、法相の如く解す故に如來と名づくるなりと。

如如の境と智と合するを以ての故に、即ち能く處々に正覺を成ずることを示す。

水銀は眞金に和して、能く諸の色像を塗る。功徳は法身と和して處處に應現して往く。

八相成道して妙法輪を轉ずるは、即ち應身の如來なり。」

「法華玄義」五下、類通三身、大正蔵経三三、745ｂ

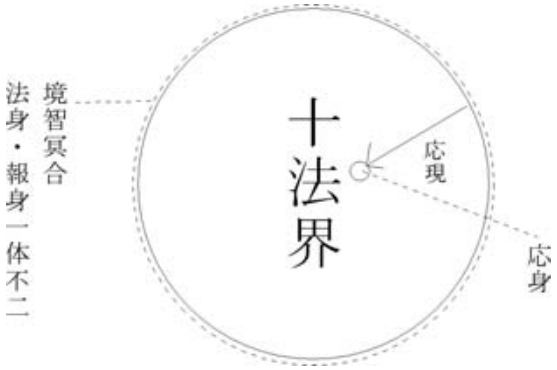
「法界性論に云く、水銀は眞金に和して能く諸の色像を塗る。

功徳は法身と和して處處に應現して往く。」

境―法身―眞金

智―報身―水銀

水銀和眞金能塗諸色像　境智冥合　處處應現―応身



「水銀和眞金能塗諸色像」つまりは、純金を水銀に溶かすことにより、流動性をもった物質となり、様々な像に塗布する事が可能になる。このように、境―法身と智―報身が境智冥合することにより、佛慧が法身の境に沿って移動できるという流動性をもつ存在になり、衆生と感応するところ法界内のどの場所にも応身として現れることが可能になった訳である。（上図参照）

境智冥合した佛が法界に遍満している事により、佛の智慧は、常に法界内の全ての存在を同時に認識した状態にある。この智慧が法界内の衆生の求めを感知し、そこへ応身佛を出現させる。報身佛は、応身の智慧となって衆生教化にあたる。この様な壮大なシステムが本時成道と共に完成したという事であろう。

二、唱題成佛

以上の佛身論を踏まえた上で唱題成佛を考えてみる。

「法華玄義」一上、七番共解一票章、大正蔵経三三、683a

「宗とは三と爲す。一には示、二には簡、三には結なり。
宗とは要也。所謂る佛の自行の因果を以て宗と為す也。
云何んが要と爲す。無量の衆善、因を言へば則ち攝し、
無量の證得、果を言へば則ち攝す。綱維を提ぐるに目として動かざること無く、
衣の一角を牽くに縷として來らざること無きが如し。故に宗要と言う。
然るに諸の因果、善く須らく明かに識るべし。
（中略）
意を取て言を爲さば、因は久遠之實修を窮め、果は久遠之實證を窮む。
此の如くの因は、竪に七種の方便より高く、横に十法界法を包む。
初に此の實相の行を修するを名けて佛因と爲し、道場に得る所を名けて佛果と為す。
但だ智を以て知る可し、言以て具に可からず。
略して此の如き因果を擧げて、以て宗要と爲す耳。」

「曽谷入道殿許御書」　昭和定本九〇二頁

「爾の時に大覚世尊寿量品を演説し、然して後に十神力を示現して四大菩薩に付属したまう。其の所属の法は何物ぞ、法華経の中にも広を捨てて略を取り、略を捨てて要を取る。所謂る妙法蓮華経の五字、名体宗用教の五重玄也。」

「宗とは要也。」

神力品において、釈尊は、地涌の四菩薩に法華経を名体宗用教の五重玄義に要約して付属した(結要付属)。この五重玄義が妙法五字の内容であるが、「法華玄義」では、更に、五重玄義の中で宗玄義に功徳内容が要約されて説かれている。

「聖愚問答鈔　上」　昭和定本三九〇頁

「玄義には、名体宗用教の五重玄を建立して、妙法蓮華経の五字の功能を判釈す。五重玄を釈する中の宗の釈に云く

[綱維を提ぐるに目として動かざること無く、衣の一角を牽くに　縷として來らざること無きが如し。]

意は此妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来らざる事なく、善根として動かざる事なし。譬ば綱の目無量なれども、一つの大綱を引に不動目もなく、衣の絲筋巨多なれども、一角を取るに絲筋として来らざることなきが如しと云義也。」

題目の功徳は五重玄義に要約して説かれるが、宗玄義では、この因果の功徳は、「無量の衆善、因を言へば則ち攝し、無量の證得、果を言へば則ち攝す。」と、佛の修した無量の善行が因に収められ、無量の悟りが果に収められる

事から、網や布の一点を摘んで引くと、全体がそれにつられて引き寄せられるように、法華経全体の功徳が題目に集約されて衆生に授与されると説かれる。

「宗とは要也。所謂る佛の自行の因果を以て宗と為す也。」

「意を取て言を爲さば、因は久遠之實修を窮め、果は久遠之實證を窮む。

此の如くの因は、竪に七種の方便より高く、横に十法界法を包む。」

「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」　昭和定本七一一頁

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。」

「観心本尊抄」の「釈尊の因行果徳の二法」とは、この宗玄義の「佛自行因果」であり、「因行」とは、「久遠之實修」であり、「果徳」とは、「久遠之實證」である。題目には、この久遠実成の釈迦牟尼佛の實修・實證を因行・果徳として「妙法蓮華経の五字に具足」している。

この因果の中に十法界内の一切の法「十法界法」、延いては、釈迦牟尼佛の久遠実成の悟り「久遠之實證」である「一念三千」が内蔵されている事となる。

「初に此の實相の行を修するを名けて佛因と爲し、道場に得る所を名けて佛果と為す。

但だ智を以て知る可し、言を以て具に可からず。」

これら「釈尊の因行果徳の二法」は、言語によって認識されるものではなく、佛の「智慧」をもってのみ認識できるものである。すなわち、「因行果徳」という釈迦牟尼佛の功徳内容は、佛の「智慧」を「受持」することによって「譲与」されるものである。

「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」（前掲）

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。」

「法華文句」九下壽量品　（前掲）

「報身の智慧は上に冥じ下に契う　（中略）　正意は是れ報身佛の功徳を論ずる也。」

釈尊因行果徳二法―報身佛功徳（報身智慧上冥下契）―妙法蓮華経五字具足

因行を修し果徳を得た佛は報身佛であり、「釈尊因行果徳二法」とは報身佛の功徳である。三身の中で報身佛は、本時成道以来、上は法身佛（境）と境智冥合して一体となり、一佛乗の真理を体現し、下は応身佛の智慧となって衆生を利益するという流動性をもった智慧の働きを成している。宗祖以前の天台教学で題目の内容を考えれば、この「報身佛功徳」である流動性をもった佛の「智慧」を「妙法蓮華経五字具足」したものが題目であると考えられる。

「自然譲与彼因果功徳」とは、題目を受持する事により、衆生の佛性は法身と同体である故に、題目の功徳である報身の「智慧」が、感応道交して、衆生個々の佛性に繋がる法身の境に沿って伝わり、佛から衆生へと譲与されることが「自然譲与」と考えられる。

したがって、唱題受持とは、唱題を繰り返す事により、衆生個々の佛性に題目の佛慧を定着させる事であると考えられる。

報身の智慧は法界に遍満しているが、これを凡夫の心に本来具すものとするならば、佛の応現を必要としない訳であるから、天台は智慧の遍満を佛のみ認識できるものとしていたのであろう。したがって、性種の佛性に対して、題目は乗種の佛慧であり、地涌の菩薩の下種を必要とする。

「四信五品鈔」　昭和定本一二九六頁

「問う。末法に入て初心の行者必ず円の三学を具するやいなや。答えて曰く、此の義大事たり。故に経文を勘え出して貴辺に送付す。所謂る五品の初二三品には、仏正しく戒定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧又堪えざれば信を以て慧に代う。信の一字を詮と為す。不信は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字即位也。」

仏道修行は本来、戒・定・慧の三学を修めるものであるが、末法では、三学は智慧行に集約され、末法の衆生は名字即位において、題目(名字)を唱える以信代慧の行(唱題行)が提唱された。

「一念三千理事」　昭和定本七九頁

「次に報身とは、大師云く［法如如の智もて如如眞實の道に乗じて來て妙覺を成ずるに、智は如の理に稱う、理に従て如と名づく、智に従って來と名づくるは即ち報身の如來なり］（法華文句）　盧舎那と名け、此には浄満と翻すと釈せり。

此は如如法性の智、如如真実の道に乗じて妙覚究竟の理智法界と冥合したる時理を如と名く。智は来也。」

「曽谷殿御返事」　昭和定本一二五三頁

「それ法華経第一方便品に云く［諸仏の智慧は甚深無量なり云云。］釈して云く［境淵無辺なるが故に甚深と云い、智水測り難きが故に無量と云う。］抑此の経釈の心は仏になる道は豈に境智の二法にあらずや。されば境と云うは万法の体を云い、智と云うは自体顕照の姿を云う也。而るに境の淵ほとりなくふかき時は、智慧の水ながるゝ事つゝがなし。此の境智合しぬれば即身成仏する也。法華以前の経は、境智各別にして、而も権教方便なるが故に成仏せず。今法華経にして境智一如なる間、開示悟入の四仏知見をさとりて成仏する也。（中略）此の境智の二法は何物ぞ。但南無妙法蓮華経の五字也。此の五字を地涌の大士を召出して結要付属せしめ給う。是を本化付属の法門とは云う也。（中略）既に上行菩薩釈迦如来より妙法の智水を受て、末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う。是れ智慧の義也。釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う。然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む。」

佛の成道は、法身の境に報身の智慧が冥合する成佛であったが、衆生をこれに準えると、法身は佛性として本来備わっているが、ここに報身の智慧である題目を「以信代慧」として唱題受持する事により、佛性の境に題目の智慧が冥合して成佛する（「境智合しぬれば即身成仏する也」）と考えられる。

法界に遍満している法身の理境を佛から衆生へつながる「真実の道」として、題目の功徳である智慧がこの道に

「乗じて」来ること(「智は来也」)で、衆生個々の佛性とこの智慧が冥合して成佛する。即ち、法界に遍満する法身を媒体として、衆生に佛慧が譲与されることが、唱題受持の成佛と考えられる。

「曽谷殿御返事」では、法界に遍満する法身の境を広大な淵に譬え、報身の智慧である題目の佛慧をこの淵に沿って流れる水に譬えて「上行菩薩釈迦如来より妙法の智水を受て、末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う。是れ智慧の義也。」と、釈迦佛より題目の佛慧の付属を受けた上行菩薩の末法衆生への下種を説かれている。法身の理境に沿って題目の佛慧が上行菩薩から衆生へと下種される訳である。

○佛の成道

智―報身―
境―法身―
―境智冥合―成佛

○衆生の成佛

智―報身―題目―
境―法身―佛性―
―唱題受持―境智冥合―成佛

以信代慧

「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」昭和定本　七一二頁

「今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足、三種の世間也。」

衆生の佛性の境、題目の智慧は、三身即一の釈迦牟尼佛の法身(境)、報身(智慧)と同一である故に、唱題受持し境智冥合の悟りを得ると、法界に遍満する釈迦牟尼佛と「同体」であることが認識される。娑婆国土に遍満する法身佛自体が円教浄土の常寂光土であり、佛慧を得ることにより法身の境が認識され、娑婆即寂光の浄土となる。

「日女御前御返事」　昭和定本一三七五頁

「龍樹・天親等、天台・妙楽等だにも顕し給はざる大曼荼羅を、末法二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるしとして顕し奉るなり。(中略)されば首題の五字中央にかかり、四大天王は宝塔の四方に坐し、釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ、(中略)　此等の仏・菩薩・大聖等、総じて序品列坐の二界八番の雑衆等、一人ももれず。此御本尊の中に住し給う、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。是を本尊とは申す也。」

「曽谷殿御返事」　(前掲)

「境と云うは万法の体を云い、智と云うは自体顕照の姿を云う也。(中略)此の境智合しぬれば即身成仏する也。(中略)此の境智の二法は何物ぞ。但南無妙法蓮華経の五字也。」

大曼荼羅本尊の題目は、「妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。」と、光明点を以て書き表されるが、この「妙法五字の光明」とは、「智と云うは自体顕照の姿を云う也。」即ち、境を証して照らし顕す智慧の光明であり、題目の佛慧が十界の諸尊を境として証し照らし顕す様相を示すと考えられる。したがって、大曼荼羅本尊は、題目の佛慧によって証される衆生成佛の相を虚空会の説相に合わせて示したものと考えられる。

「撰時抄」　昭和定本　一〇五三～五四頁

「余に三度のかうみやう（高名）あり。

一には去し文応元年［太歳庚申］七月十六日に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、（略）

二去し文永八年九月十二日申時に平左衛門尉向云（略）

第三去年［文永十一年］四月八日左衛門尉語云、（略）

此の三の大事は日蓮が申たるにはあらず。只偏に釈迦如来の御神我身に入かわせ給けるにや。我身ながらも悦び身にあまる。法華経の一念三千と申大事の法門はこれなり。

経に云、所謂諸法如是相と申は何事ぞ。十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば、仏は世にいでさせ給。智人起をしる、蛇みづから蛇をしるとはこれなり。衆流あつまりて大海となる。微塵つもりて須弥山となれり。

日蓮が法華経を信始しは日本国には一滴一微塵のごとし。法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は此よりほかに又もとむる事なかれ。」

「波木井殿御書」　昭和定本一九二九頁

「末法に法華経の行者は人に怨まれてかゝる難有べし、と仏説給て候へば、偏に釈迦如来の御神我身に入せ給てこそ候へ。されば我身ながら悦身に余れり。日蓮は日本の大難を払、国を持べき日本国の柱也。（中略）国の恩を報ぜんがために国に留り三度は諫べし。」

唱題受持を続け、己心に佛慧を定着させる事（「釈迦如来の御神我身に入かわせ給ける」）により、自己を媒介に佛意（三度の諫暁）を現実世界に顕現させる事が可能となる。

「一念三千は九界即仏界、仏界即九界と談ず。」　「撰時抄」　昭和定本　一〇〇三頁

日蓮聖人は、一念三千の構成要素の中で十界互具を重視されたが、更に胆略化され人界に佛界を具すことで一念三千が成立すると考えられた。

事の一念三千の法門は、唱題受持して己心に佛慧を定着させることにより、己心に佛界を具す事と、これを基盤として自己を媒介に法華経を弘通して現実世界に佛界を形成していくこと、すなわち、唱題受持して自己の内と外に佛界を形成していく事であろう。

事の一念三千―佛慧―題目―唱題受持―

内―己心具仏界「釈迦如来の御神我身に入かわせ給」

個人の成佛（菩薩化）

→自利

外―人界具佛界「三度の諫暁」

←利他　「法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり」

浄佛国土

（国土全体の成佛）

「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」昭和定本　七一九頁

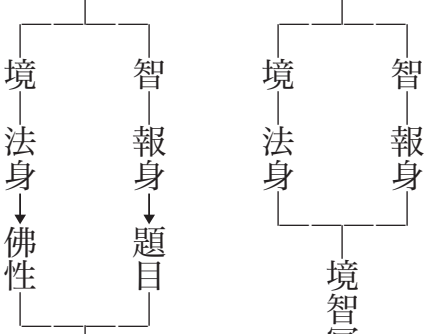
「今末法の初、小を以て大を打ち、権を以て実を破し、東西共に之を失し天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せ

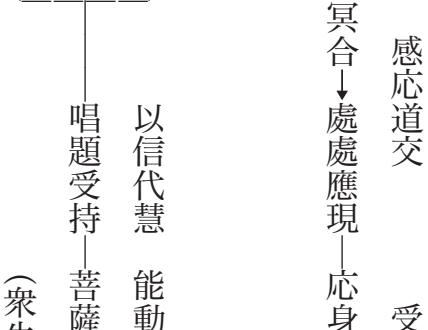
ず。諸天其の国を弃て之を守護せず。此の時、地涌の菩薩始て世に出現し、但だ妙法蓮華経の五字を以て幼稚に服せしむ。因謗堕悪必因得益とは是也。」

法華経神力品で四菩薩を代表とする地涌の菩薩に釈尊が妙法五字を付属した(結要付属)。宗祖は、この地涌の菩薩の自覚に立ち、妙法五字の題目を世間に広められた。この様に、法華経所説の世界を現実に再現する事が、自己の外に仏界を形成する事であろう。

「曽谷殿御返事」(前掲)

「此の境智の二法は何物ぞ。但南無妙法蓮華経の五字也。此の五字を地涌の大士を召出して結要付属せしめ給う。是を本化付属の法門とは云う也。」





久遠実成の釈迦牟尼佛は、境智冥合し応身の応現する基盤として、法界に遍満して存在している。

天台の理論では、この佛との感応道交により、応身が「處處應現」し、衆生を化導するのを待つ訳であるが、「迹化四依隠不現前」の末法において宗祖は、釈尊より地涌の菩薩に付属された題目の佛慧を自ら受持し、法華経弘宣流布、題目下種の化導を行われた。

「報身智慧上冥下契」の三身説によれば、報身の智慧が応身を媒介として現実世界に化導する訳であるが、宗祖においては、報身の智慧は、題目に納められ、これを付属された地涌の菩薩を媒介として現実世界に化導したという事になる。

以上、述べてきた通り、日蓮聖人の唱題成佛論は、天台の佛身論を応用して成立したものと考えられる。